

スポーツチームにおける「問題児」とのコミュニケーション

荒井, 弘和 / HORIKAWA, Anna / ARAI, Hirokazu / 荒井, 孝
行 / SUZUKI, Fumiya / 鈴木, 郁弥

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学スポーツ研究センター紀要 / Bulletin of sports research center,
Hosei University

(巻 / Volume)

34

(開始ページ / Start Page)

11

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012940>

スポーツチームにおける「問題児」とのコミュニケーション

Communication with “cancer” of the sport team

荒 井 孝 行 (JSN サッカースクール)

Takayuki Arai

鈴 木 郁 弥 (法政大学大学院人文科学研究科修士課程)

Fumiya Suzuki 大学院生

荒 井 弘 和 (法政大学文学部・市ヶ谷リベラルアーツセンター保健体育分科会)

Hirokazu Arai 准教授

要 旨

本研究の目的は、大学生競技者を対象として、質問紙を用いてスポーツチームの「問題児」とされている選手に対するコミュニケーションについて検討を行うことであった。4年制大学の体育会運動部に在籍する大学生競技者を対象に、横断的調査を行った。重回帰分析を行った結果、ネガティブコーピングを従属変数とした場合の重回帰分析の結果は、Big Five 尺度の誠実性のみが有意に寄与していた。ポジティブコーピングを従属変数とした場合の重回帰分析では、これもネガティブコーピングと同じ誠実性が有意に寄与していた。これらの結果から、問題児に対してネガティブかポジティブのいずれかのコーピングする人は問題児に誠実性が影響している可能性が考えられた。

キーワード: 大学生競技者, ストレスコーピング, 誠実性, チームのがん

Key words: collegiate athlete, stress coping, conscientiousness, cancer of the team

I. 問題と目的

スポーツチームの「問題児」

スポーツチームには、いわゆる「問題児」が存在する場合がある。「チームのがん」¹⁾とも呼ばれる問題児には、様々なタイプがいる。チーム内外での素行が悪い選手、向上心がない選手、協調性がない選手などである。

しかし、上記で挙げた性質を備えている選手であっても、チームの種類や方針、周りの環境によっては問題児とならない場合がある。例えば、チーム方針が勝利至上主義であった場合、チーム内外での素行が悪い選手であっても試合で結果を出せる選手であれば、その選手はチームでは問題児となり得ない。一方で、協調性がある選手であったとしても、勝利至上主義のチームの場合、実力が伴わない選手が問題児とされる場合もある。

このように、チームの方針や周りの環境によって問題児が優秀な選手へ、優秀な選手が問題児になり得る可能性がある。また、問題児がチームに存在したとして、問題児をチームから排除することがチームのためになるのか、それとも、チームの環境や指導者、チームメイトがうまく問題児を活かす方がチームのためになるのかは不明である。海外においては、わずかに Cope et al.¹⁾の研究等があるが、わが国では、スポーツにおける問題児に着目した研究は見られない。

そこで本研究は、スポーツチームに存在する問題児に着

目し、チームメイトが問題児に対して行っているコミュニケーションの検討を行う。

問題児に関する予備調査

本研究の予備調査として、スポーツチームの指導者を対象に問題児の定義についての調査を行った。予備調査では、サッカーの育成年代を指導する指導者3名を研究対象者として、自由記述式の質問紙を用いた。質問の内容は「問題児とはどのような選手か、どんな問題行動があるか」であった。1人あたりの調査時間は15—20分程度であった。調査を行う際は、対象者1名と調査者1名だけの空間を作り、自分の意見を率直に回答してもらえるように工夫した。

データの整理・集約は、KJ法の4つのステップのうち、1つ目の「紙切れづくり」および2つ目の「グループ編成」に基づいて行った。報告された自由記述を改変することなく1つずつカードにした上で、作業者間で議論を行い、研究目的に鑑みて、同意にいたるまで吟味・検討した上で、それらのカードをカテゴリに整理・集約した。集約が困難な回答があった場合は、無理に他の回答群に集約せず、そのまま独立して扱った。分析作業は心理学を専攻する大学生4名で実施された。なお、意味が不明瞭な回答や目的を外れる回答は分析の過程で除外した。なお本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究実施の承認を得て実施した。

その結果、問題児についての回答は、「チームメイト（自

分以外)に迷惑をかける選手」「向上心のない選手」「その他」の3つのカテゴリに整理・集約できたが、Table 1に示すとおり、多様な回答が得られた。

Table 1 指導者を対象とした問題児についての予備調査結果

カテゴリ	具体的な回答
チームメイト（自分以外）に迷惑をかける（9）	気性の激しい選手 他人に迷惑をかける選手 暴力行為をする選手 犯罪行為をする選手 危険なプレーや行動を理解していない選手 集合できない選手 他人を尊重できない選手 協調性にかける選手
向上心がない選手（9）	チームのための行動がとれない選手 人の話を聞けない選手 集中できない選手 全力で取り組めない選手 つらいことから逃げる選手 チームにいる理由を理解していない選手 準備運動をしっかりとやらない選手 練習に目的を持ってない選手 1日を何も学ばずに終わってしまう選手
その他（2）	私生活が乱れている選手 プレー以外に全く興味が無い選手 自分の意見に自信を持っていない選手

本研究では、予備調査の結果と、先行研究¹⁾を踏まえて、問題児を「チームにネガティブな影響を与える選手」と広く定義する。

本研究の目的

本研究の目的は、スポーツチームに存在する問題児に着目し、対人ストレスコーピングの考え方をを用いて、チームの問題児に対するコミュニケーションの検討を行うことである。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象者

調査対象者は首都圏にある4年制大学の体育会運動部に在籍する大学生競技者101名（男性78名、女性22名、欠損1名）であった。

2. 調査期間

調査期間は2013年7月上旬であった。

3. 調査項目

1) 個人の属性

性別、年齢、学年、所属部、現在行っている競技の経験年数について、回答を求めた。

2) 問題児に対するコーピング

問題児が引き起こす対人ストレスイベントに対するコーピングの個人差を測定するため、本研究では短縮版対人ストレスコーピング尺度²⁾を使用した。本尺度は「ポジティブ関係コーピング」「ネガティブ関係コーピング」「解決先送りコーピング」の3下位尺度（各5項目）で構成されてい

る。本研究では「あなたは、現在所属している（チーム全体にネガティブな影響を与える選手）との人間関係のストレスに対して、普段、どのように考えたり、行動したりしますか」と教示し、各項目について4件法（「あてはまらない（1）」「少しあてはまる（2）」「あてはまる（3）」「よくあてはまる（4）」）で回答を求めた。

3) 集団同一視尺度

所属する集団への同一視を測定するため、集団に対する同一視と、成員に対する同一視の2つの下位尺度を持つ集団同一視尺度³⁾を使用した。集団同一視尺度には、7項目版と12項目版がある。12項目版は、7項目版に新たに5項目版を追加したことにより、2因子構造、成員に対する同一視の構造を安定させ、下位尺度の有用性を高めた改良版である。本研究では、12項目版の尺度を使用した。

4) Big Five 尺度短縮版

調査対象者の考える問題児の特性を明らかにする為に、Big Five 尺度短縮版⁴⁾を使用した。この尺度はパーソナリティを情緒不安定性 (Neuroticism)、外向性 (Extraversion)、開放性 (Openness)、調和性 (Agreeableness)、誠実性 (Conscientiousness) の5つの因子から測定する尺度である。本研究では参加者の負担軽減を考え、外向性と情緒不安定性が5項目、開放性と調和性が6項目、誠実性が7項目の計29項目からなる短縮版の尺度を使用した。

5) 一体感尺度

調査対象者が現在所属しているチームに対する一体感を

測定するために、一体感尺度⁵⁾を使用した。

4. 手続き

質問紙を講義終了後に配布し、回答が終了した者から調査者に手渡しで提出するように依頼した。質問紙には調査同意書を添付し、調査に同意した者には署名を求めた。また、調査同意書には、回答は任意のものであること、同意しなかった場合にも参加者に不利益が生じることがないこと、回収した情報は厳重に保管し、他の目的で利用、開示されることは一切なく、調査終了後は用紙を破棄してプライバシーが保護されることを明記し、調査者が配布時にこれらの説明を行った。また本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究実施の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象者の人口統計学的データ

質問紙の配布数は101、回収数は101であった。そのうち9名の調査対象者を記入漏れ等の理由により除外し、92名のデータを分析対象とした。92名の所属部活動はそれぞれ、剣道5名、バスケットボール8名、フェンシング6名、自転車競技7名、バレーボール1名、アイスホッケー2名、ヨット2名、卓球5名、アメリカンフットボール4名、相撲2名、空手1名、レスリング6名、ゴルフ2名、ボクシング2名、柔道4名、スケート1名、弓道7名、バトミントン4名、硬式野球11名、水泳1名、重量挙げ4名、ボート6名であった。いずれの部活動も、大学の体育会に所属する部活動であった。対象者の平均年齢は19.00歳 (SD=0.83)、対象者が現在行っているスポーツの平均経験年数は8.34年 (SD = 3.57) であった。また、各尺度の因子得点の平均と標準偏差を Table 2 に示す。

Table 2 各尺度の因子得点の記述統計

		平均値	標準偏差
ストレスコーピング	年齢	19.00	.83
	学年	1.53	.68
	経験年数	8.34	3.57
	ネガティブ	9.27	3.85
	ポジティブ	10.67	3.60
集団同一視	解決先送り	12.21	3.52
	集団同一視	37.17	8.89
	成員同一視	19.89	4.46
一体感	集団への統合	12.79	4.00
Big Five	所属感	14.24	3.58
	外向性	18.56	6.05
	誠実性	29.18	6.71
	情緒不安定性	21.23	6.66
	開放性	21.45	8.25
	調和性	23.94	5.64

2. ストレスコーピングとの相関分析

まず、ストレスコーピング尺度と集団同一視尺度の関連性を見るために、相関分析を行った (Table 3)。結果として、ストレスコーピング尺度のポジティブ因子は集団同一視尺度の2因子と正の相関関係が見られた。また、解決先送り因子は成員同一視との正の相関関係が見られた。ネガティブ因子と集団同一視尺度との間には相関関係は見られなかった。

Table 3 ストレスコーピングと集団同一視の関連

	1	2	3	4
1 ネガティブ	—	—	—	—
2 ポジティブ	.13	—	—	—
3 解決先送り	.22**	.44**	—	—
4 集団同一視	.09	.27**	.18	—
5 成員同一視	.02	.30**	.23*	.71**

*p<.05 **p<.01

次に、ストレスコーピング尺度と一体感尺度との関連性を見るために、相関分析を行った (Table 4)。結果として、ストレスコーピング尺度の3因子と一体感尺度の2因子の間に相関関係は見られなかった。

Table 4 ストレスコーピングと一体感の関連

	1	2	3	4
1 ネガティブ	—	—	—	—
2 ポジティブ	.13	—	—	—
3 解決先送り	.22*	.44**	—	—
4 集団への統合	— .13	.06	.04	—
5 所属感	— .13	.16	.19	.70**

*p<.05 **p<.01

さらに、ストレスコーピング尺度と短縮版 Big Five 尺度との関連性を見るために、相関分析を行った (Table 5)。結果として、ストレスコーピング尺度のネガティブ因子とは

Big Five 尺度の誠実性因子、調和性因子との間で正の相関関係が見られた。ポジティブ因子とは誠実性との間のみに

正の相関関係が見られた。解決先送り因子と Big Five 尺度との間には相関関係を見ることができなかった。

Table 5 ストレスコーピングと Big Five との関連

	1	2	3	4	5	6	7
1 ネガティブ	—	—	—	—	—	—	—
2 ポジティブ	.13	—	—	—	—	—	—
3 解決先送り	.22*	.44**	—	—	—	—	—
4 外向性	.16	.15	.06	—	—	—	—
5 誠実性	.35**	.25*	.10	.45**	—	—	—
6 情緒不安定性	.12	.19	.08	.39**	.46**	—	—
7 開放性	-.01	.20	.04	.61**	.31**	.24*	—
8 調和性	.21*	.12	.05	.51**	.58**	.31**	.59**

*p<.05 **p<.01

3. ストレスコーピングを基準変数とした重回帰分析

まず、基準変数をストレスコーピングのネガティブコーピング、独立変数として、相関分析を行った際に有意な相関関係が見られた Big Five の調和性・誠実性、集団同一視の集団同一視・成員同一視とした重回帰分析を行った (Figure

1)。この結果からネガティブコーピングに関しては誠実性 ($\beta = .36$, $p < .01$) のみが有意に寄与していた ($R^2 = .12$)。調和性、集団同一視、成員同一視の間には関連は見られなかった。

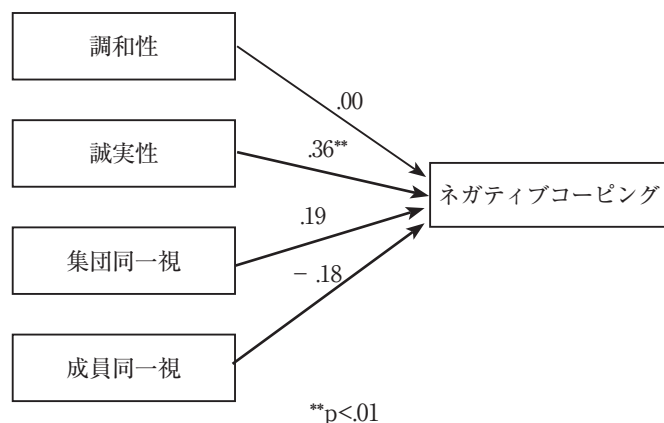


Figure 1 Big Five と集団同一視がネガティブコーピングに与える影響

次に、従属変数をポジティブコーピング、独立変数を調和性・誠実性および集団同一視・成員同一視とした重回帰分析を行った (Figure 2)。この結果からポジティブコーピ

ングに関しては Big Five の誠実性 ($\beta = .25$, $p < .05$) のみが有意に寄与していた ($R^2 = .13$)。調和性、集団同一視、成員同一視の間には関連は見られなかった。

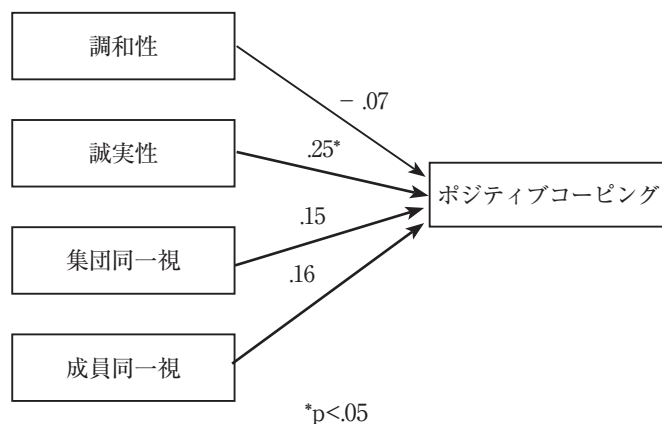


Figure 2 Big Five と集団同一視がポジティブコーピングに与える影響

つづいて、従属変数を解決先送りコーピング、独立変数を調和性・誠実性および集団同一視・成員同一視とした重回帰分析を行った (Figure 3)。この結果から解決先送り

コーピングに関しては、調和性、誠実性、集団同一視、成員同一視の中で有意に寄与する因子は見られなかった。

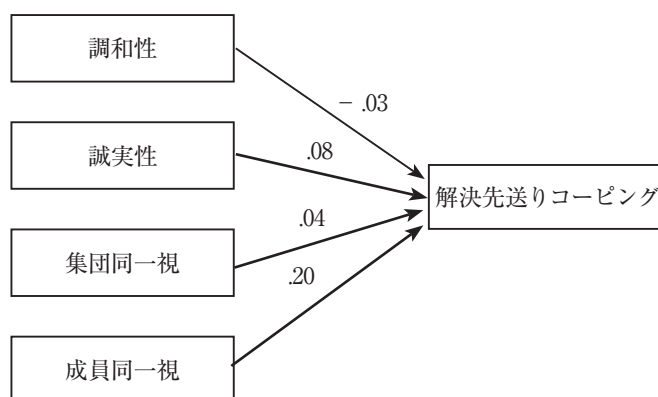


Figure 3 Big Five と集団同一視が解決先送りコーピングに与える影響

IV. 考 察

本研究の目的は、大学生競技者を対象として、質問紙を用いてスポーツチームの問題児とされている選手に対するコミュニケーションについて検討を行うことであった。

ネガティブコーピングを従属変数とした場合の重回帰分析の結果は、Big Five 尺度の誠実性のみが有意に寄与していた。これは、問題児とのストレスイベントに対してのネガティブコーピングには問題児の性格特性の中にある誠実性が影響している可能性があることが示唆されている。このことから、問題児とのストレスイベントに対して、ネガティブなコーピングが現れる原因の一つとして、問題児の性格特性として誠実性が挙げられる可能性がある。

次に、ポジティブコーピングを従属変数とした場合の重回帰分析の結果は、これもネガティブコーピングと同じ誠実性が有意に寄与していた。これも、問題児とのストレスイベントの際に問題児に対してポジティブなコーピングをする人が抱く問題児の性格特性に誠実性を抱いていることを表している。これらの結果から、問題児とのストレスイベントに対してネガティブかポジティブのいずれかのコーピングする人は問題児に誠実性が影響している可能性が考えられた。

今回の調査では問題児自身に性格特性の調査を行うことが困難であった。そのため、本研究では調査対象者がイメージする問題児の性格特性について調査している。よって、本研究においては、コーピングを行う側が持っている問題児のイメージに誠実性があったが、実際にコーピングが行われている問題児に誠実性があるかどうかを測ったものではないため、今後は問題児自身にも焦点を当てた研究が必要である。

また、本研究では、実際に問題児と接したことがあるか、または、特定の問題児を想定したか、そして、特定の問題

児を想定した場合、どれくらい鮮明に想定できたか等について、検討できていない。今後は、そのような変数についても押さえた上で、データ分析を行うことが期待される。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査に参加していただいた皆様に多大なご協力をいただきました。皆様に記して感謝の意を表します。

引用文献

- 1) Cope, C.J., Eys, M.A., Schinke, R.J., & Bosselut, G. (2010). Coaches' perspectives of a negative informal role: The 'cancer' within sport teams. *Journal of Applied Sport Psychology*, 22, 420-436.
- 2) 加藤 司 (2000) . 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
- 3) Karasawa, M. (1991) . Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- 4) 並川 努・谷伊 織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之 (2012) . Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 5) Yamada, K., Arai, H., Nakazawa, T., Kawata, Y., Kamimura, A., & Hirokawa, M. (2013) . A study of the unity of sports teams: Development of a scale and examination of related factors. *Journal of Physical Education and Sport*, 13, 489-497.